

# 「存在と時間」を中心とする

## ハイデッガーの根據について

加藤 隆 生

「現存在は投げられた世界内存在としてその都度既にその死に引渡されてゐる」(259)。然し現存在が死の中へ投げ込まれてゐること、従つて死が同時に世界内存在に屬してゐることに就て現存在は先づ大抵明瞭な知を、まして理論的な知を持つてゐない。事實多くの人が先づ大抵死を知つてゐないと云ふ事は、現存在が先づ大抵死への最も自己的な存在をば死を逃避しつゝ蔽ふてゐる事の證左である(251)。この「死からの日常的頹落的な逃避は非本來的な死への存在である(259)。現存在はこの死への最も自己的な存在から「ヒト」(das Man)へ逃避的に旋回(Wirbel)する。「現存在は自己自身から自己自身へ轉落する」(178)。「ヒト」に於ける非本來的存在の無地盤の中へ現存在は轉落し、之によつて彼は、絶えず彼の本來的可能性への投企から引離されて、すべてを

所有してゐる、乃至はすべてを獲得してゐると云ふ慰安的な想像の中へ引入られてしまふ。「この不斷に本來性から引離され而も常に本來性を先づ誤ることは、ヒトに引入られる事と一諸になつて旋回としての頹落の運動性を性格付けてゐる」(178)。この旋回は同時に、現存在の心情性の中で彼自身に襲ひかゝつて來る事の出來る被投性の運動的性格を開示してゐる(179)。被投性は出來上つた眼前的な事象でないのみならず、全く閉されてしまつて最早や決して開かれぬ事實でもない。この事實の事實性には、現存在は常に世界へ投げ込まれ、死へ投げ込まれてゐるが、然し同時に先づ大抵はヒトの非本來性の中へ旋回せしめられてゐると云ふことが屬してゐる。世界へ投げられてゐる事、死へ投げられてゐる事は、先づ最初は現存在自身によつて本來的に明白に捕へ

られない。現存在の中にある運動性は既に現存在が世界に投げ込まれ、死へ投げ込まれて在ることによつて停止されない。現存在はその被投性に於て、共に連れ去られ、ヒトの無地盤の上に足場を得てゐる。即ち現存在は世界及び死の中へ投げ込まれたものとして同時に先づ大抵は配慮さるべきものへの事實的依存性に於てヒトへ自己を失つてゐる。換言すれば、現存在は彼が生れるや否や世界の中へ投げられ、死の中へ投げ込まれてゐるが、かゝる在り方をば自己の宿命として明白に自覺し、かゝる在り方の中に本來的に實存すると云ふのではなくして、世界へ投げられ、死へ投げ込まれつゝ同時にヒトの非本來性の中へ自己を失つてゐる。即ち被投性を逃避し、本來の自己を逃避しつゝ非本來的な先づ大抵の在り方へ自己を移してゐる。決意が初めてこの非本來的な在り方から本來的な在り方へ返へらせるようにする。即ち「死への存在へ投げ込まれて現存在は先づ大抵この多少共明瞭に開示せられた被投性から逃避してゐる。現在はその本來的將來と既在とから逃れて、その結果初めて自分を越えた迂路に於て現存在をその本來的實存に返へらせるようにするのである」(348)。この迂路的に本來的實存へ歸來せしめ、類落的没入から本來的な死への存在へと

現存在を呼び戻すものは良心としての先驅的決意性である。「良心(Gewissen)は或物を了解させる。即ち良心は開示する」。然し「良心の更に立入つた分析は良心を呼ぶこと(Ruf)として顯はにする」(369)。現存在はヒトの中へ本來の自己を失つて、ヒトへ自己と云ふ非本來的自己の在り方になつてゐるから、先づ何より現存在は自己を再び見出さねばならない(266)。ヒトの公衆性とその空談の中へ自己を失つてゐて、現存在はヒトへ自己を聞くことに依つて本來の自己を聞き逃がしてゐる。現存在が若しこの自己を聞き逃がしてゐる意味のヒトへの没入性から連れ返へされる事によつて、—勿論現存在自身に依つて—あるが—現存在は初めて自己自身を見出すことが出来る、即ちヒトに聞き入る事に於て聞き逃がされてゐる所の自己自身を取り返へす事が出来る(271)。即ち「呼ぶことが、ヒトへ現存在が自己を聞き逃し乍ら聞き入つてゐることをば打ち破る」(271)。自己はこの呼び掛けに於てこのヒトと云ふ隠れ家と陷阱を奪ひとられ、呼ぶことによつて自己自身へ齎らされるのである(273)。呼ぶこととしての良心に於て呼び出されるものはこの自己自身であるが、尙突つ込んでそれは如何に規定されるだらうか。又良心の呼ぶことに於て呼ぶ者(Ruf-

ter)は誰であらうか。呼ぶ者は無規定的である。「呼ぶことは私から出て私を超えて行きつゝ私に向つて發せられる」(275)。然し「呼ぶことは私に依つて明瞭に行はれなご寧ろ『ソレ』(es)が呼ぶのである」(276)。この不定な「ソレ」は世界内部的な一定のこの物とかあの物とかと云ふ風には何物によつても規定されぬものである。この呼ぶ者としての「ソレ」は「無氣味性に於る現存在、落着かぬものとしての根源的被投的な世界内存在、世界の無の中にあるむき出しの事實(Das)を指すのである」。そして「無氣味性の根據に於て自己を見出す現存在が、良心の呼ぶことと呼ぶ者である」(276)。かようにして呼ぶ者は、日常的なヒト「自己には親しまれてゐない、即ち「見知らぬ聲」(eine fremde Stimme)と云ふが如きものである(277)。一體配慮せられた様々の世界に没入してしまつてゐるヒトに對して、無氣味性の中で自己へ單獨化され、世界の無—無意義性—の中へ投げ込まれた自己以上に見知らぬものがあり得るだらうか(277)。無氣味性とは世界の無の中へ投げられ、且かゝる無の中へ投げられた存在の仕方の中へ引渡された被投性の様相であり、且「この無氣味性は日常的には蔽はれてゐるが世界内存在の根本様相である。現存在自身が

この存在の根據から良心として呼ぶのである」(277)。然し現存在はその被投存在の無氣味性から何を呼び出し何を知らしめるのか。一體現存在には、不安に於て顯はにされる彼自身の最も自己的な存在可能以外に何があるであらう(277)。こゝに良心は「關心の呼ぶこと」(Ruf der Sorge)として顯はにせられる。即ち「呼ぶ者は、自己の存在可能のために、その被投性(既に中にある)に於て不安がつてゐる現存在である。呼び掛けられた者も正にこの現存在であり、それはその最も自己的な存在可能(自らに先んじてゐる)へと呼び出されてゐる。而も現存在はヒトへの頽落(配慮せられた世界のもとに既にあること)から呼び掛けによつて呼び出されてゐる」(277)。かようにして所謂關心は動的性格を帯びる。然らばこの呼ぶ者と呼び出された者とは良心の呼ぶことに於て如何なる關係にあるのか。呼ぶことは現存在をその存在可能へと先んじて呼び出し、而もそれは無氣味性からの呼ぶこととして呼び出す。「勿論呼ぶ者は無規定的である—然し呼ぶ者が其處から呼ぶ所の『何處から』(Woher)は、呼ぶ働きにとつて無關心に止つてはゐない。この『何處から』—被投的な單獨化の無氣味さ—が呼ぶ働きの中で共に呼ばれてゐるのである。即ち共に開

示せられてゐるのである。何かを先んじて呼び出す働き  
 の『何處から』は、呼び返す働きの『何處へ』(Wohin)で  
 ある。つまり「呼ぶことの開示性格は、吾々がそれを  
 先んじて呼び出しつつ呼び返すこと (vorrufender Rück-  
 ruf)」として了解する時に初めて完全に規定されるので  
 ある」(280)。「先んじて (vor)」とは「現存在がそれ  
 ある所の被投的存在者を自ら實存的に引受ける (über-  
 nehmen) 可能性へ先んじて行くこと」であり、「返す  
 (zurück)」とは「現存在が實存の中へ受け容れねばな  
 らぬ非的な根據 (nichziger Grund) として被投性をば  
 了解するために被投性へ還ること」である (287)。良心  
 の呼びことに於て呼ぶ者は無氣味な被投性に於ける現存  
 在である。呼び出された者も同じ被投的現存在であり、  
 之がその存在可能へと呼び出されてゐる。呼び出しは同  
 時に呼ぶ者への呼び返しである。且かゝる先き呼びの呼  
 び返しに於ては、呼ぶ働き自身現存在の在り方である。  
 呼ぶ働きはこの働きを所有するもの、乃至は神といふや  
 うなものに連關付けられてはいけな。現存在が呼ぶ者  
 として呼ぶのである。呼ぶ者は必然的に呼ぶ働きでなけ  
 ればならない。而も呼ぶ者は唯……へ呼び出すことに於  
 てのみ出現する (275)。呼ぶ者は呼ぶ働きに於て且その

働きを通じてのみ自分自身を露はにするのである。「良  
 心の呼ぶことは現存在をばその最も自己的な自己存在可  
 能の上へ呼び掛けることの性格を持つており、従つてそ  
 の最も自己的な『負目存在』(Schuldigsein) へ呼び出  
 すと云ふ仕方に於ける呼ぶことの性格を有する」(269)。  
 最も自己的な自己存在可能とは更に負目存在であると規  
 定せられる。良心が呼び出すこの「負目存在」への現存  
 在の自己投企は決意性と呼ばれる。「決意性とは、最も  
 自己的な『負目存在』への、不安を要求する、沈黙の自  
 己投企である」と特徴付けられる。然し決意性が根源的  
 にそれがあらうとする所のものである場合、決意性は最  
 も自己的な全體的根源的な可能性への自己投企でなけれ  
 ばならない。然るに吾々がかゝる存在可能への現存在の  
 根源的存在を死への存在、即ち現存在の最も勝れた可能  
 性への存在として規定する。先驅がこの可能性を可能性  
 として開示する。「それ故に決意性は先驅の決意性とし  
 て初めて現存在の最も自己的な存在可能への根源的存在  
 となる」(306)。

さて死はハイデッガーに依れば現存在の「最も自己的  
 な無交渉的な追ひ越し得ざる可能性」であり(250)、「す  
 べて實存することの不可能性の可能性」である(262)。



死は現存在の終り (Ende) であり (358)、世界内存在の終りである (424)。かゝる現存在の終りとしての死は現存在の端的な非性である。然し乍ら最も自己的な無交渉的な追ひ越し得ない可能性としての死を現存在はその存在の経過中に、後から與へられるのではない。現存在が實存してゐるなら、いつでも現存在は既にこの可能性へ投げ込まれてゐるのである (351)。死の分析はそれがこの死の現象を、それがその都度現存在の存在可能性として現存在の中へ入り込んでゐる状態に基いて説明してゐる限り、純粹に「此岸的」である (248)。死は現存在の終る時に附加はるものでなくて (306)、現存在の終りとして、この存在者の終りへの存在の中に存してゐるのである (359)。死は現存在から離れて存するのではなく、現存在は終りへの存在 (Sein zum Ende) 或ひは死への存在 (Sein zum Tode) として死をばその構成契機として既に常にもつてゐるのである。

ところで負目存在とはハイデガーによれば非性の非的根據であることを意味する。現存在は決意する事に依つて、現存在がその非性としての死の非的根據であることとをば本來的に引受ける。「吾々は死を實存論的に、實存の不可能性の可能性として、即ち現存在の端的な非性

として解した。死は現存在に、彼の終る時に附加はるものでなく、關心として現存在は彼の死の被投的(非的)根據なのである。現存在の存在を貫いて根源的に支配してゐる非性が、現存在自身に死への本來的存在の中で開示される。先驅は『負目存在』を現存在の全體存在の根據から初めて開示する。……先驅的決意性が初めて『負目存在可能』を本來的全體的に、即ち根源的に了解する」(306)。この先驅的決意性に於て開示される根據は非的根據である。根據自身非的(被投的)根據として非性を有する。ところが死への存在は本質的に不安である。この不安の中で現存在は死と云ふ彼れの實存の可能なる不可能性の無の前に置かれてゐる (366)。而も「不安がその前に齎す所の無は、それ自身死への被投性として存在してゐる彼れの根據に於て、現存在を規定してゐる非性を顯はにする」(308)。非性の非的(被投的)根據は根源的に規定せらるれば死の非的(被投的)根據である。この被投的根據は死への被投性であると規定せられた。更にこの根據自身が非性の性格を有するのであるから、死への被投性自身が非性の性格を有するのである。良心の呼ぶことに於る先き呼びの呼び返しは、根源的にはこの死への被投性へ呼び返すのである。死への被投性と

は、死の中へ投げ込まれてあることであり、死への存在へ投げ込まれてあることである。世界内存在（世に在る）とは根源的には「死への被投的存在として世に在る」(344)ことである。現存在（世に在るもの）は投げられた世に在るものとして常に「世に在ることの終りなる死」(424)へ引渡され、「死への存在の中へ投げ込まれてゐる」(339)。之が死への被投性である。然らば被投的（非的）根拠とは如何なる性格のものであらうか。

さて現存在は實存し乍ら決してその被投性の背後へ還らぬ。「現存在は實存しつゝ彼の存在可能の根拠である。現存在はこの根拠を自ら置かなかつたとはいへ、氣分をば現存在に對して重荷として露はならしめる所のこの根拠の重壓の中に安つてゐるのである」(384)。かやうな根拠は現存在自身によつて齎らされたものではない。現存在は如何様にしてかゝる被投的根拠であるのか。「それは唯現存在がそこへ投げ込まれてゐる可能性へ自己を投企すると云ふ仕方にてのみさうである。それ自ら自己自身の根拠を置かねばならぬ自己は、決してこの根拠を支配するやうになり得ないにかゝはらず、實存しつゝこの根拠存在を引受けねばならない。自らの被投的根拠であることが關心の關はる存在可能である」

(394)。つまり根拠は存在可能の根拠である一方、この根拠自身がまた存在可能なのである。之は根拠自身の自己運動性格を表はす。根拠の運動性は被投的な可能性への自己投企と云ふ事によつて示される。根拠はそれが現存在自身によつて置かれたのではないと云ふ被投性格を有する一方、かかる投企性格を有する。「現存在は彼の根拠以前には決して實存的に存在せずその都度唯根拠から且根拠としてのみ實存的に存在する」(384)。「根拠はいつでも存在者の根拠であり、存在者の存在は根拠であることを引受けねばならない」(395)。存在者の根拠として根拠はこの存在者の存在可能の根拠であり、同時にそれ自ら存在可能である。この存在可能を自ら引受け根拠として存在することはかの根拠自身に還ることではなればならぬ。被投的根拠の背後へ還ることは出来ないが投企的に根拠自身へ還ると云ふこの點に實存の實存たる所以が存する。根拠が自ら、自分自身を存在可能として投企し、この存在可能を引受けることによつて根拠自身に還歸し、根拠として存在すると云ふこの自らの投企の性格が根拠の自己投企の自由、即ち根拠付けの自由性格を表明する。根拠は自己投企的に根拠を置く働き、即ち根拠付けでなければならぬ。根拠付けは根拠に即した働き

であつて、決して根據付けの働きの所有者からの働きではない。茲に即してと云ふのは根據が根據付けの働きの所有者ではなく根據自身が既に動的であること、即ち根據(Grund)は必然に根據付け(Grundlegen)であることを表はす。この根據即根據付けに於ては、根據、根據付け、及び引受けられ置かれた根據の相即的同一性が現成する。然しこの根據は現存在自身が齎したものでない所の被投的根據である。現存在は決してこの被投性の背後へ還ることは出来ない。現存在は己れの根據の根據を自己自身の中に有せず、従つて「何處から」投げられ「何處へ」還るかに關しては暗黒である。若し現存在が自らこの暗黒な「何處」かへ投企的に超越還歸出来るなら、かゝる根據は自分自身でかゝる暗黒な「何處から」「何處へ」と自己自身を投げ置くことが出来るやうな現存在の根據となり、かくては却つて投げる根據となり「投げられた根據」の否定となる。被投的とは、かゝる暗黒な「何處へ」の投企的還歸が現存在にとつては不可能であり、この暗黒な「何處へ」の連りが現存在にとつて斷絶してゐることを表明する。根據は自分自身を超越してこの根據が「何處から」投げられたその其處へこの根據自身の力によつて還歸することは出来ない。現存

在の根據は自分自身を超越する自由を有せず、唯自分自身に還歸する自由のみを與へられてゐる。根據は自分自身を支配しえなす(nie mächtig)。即ち自分自身に對して無力(Ohnmacht)である。被投的(geworfen)とは非支配的(nie mächtig)であり、非的(nichtig)であることを意味する(284)。それ故被投的根據とは非支配的即ち無力的な根據、非的根據を意味する。根據はそれ自身非性の性格を有する。死(非性)の非的根據としての死への被投性はそれ自身非性の性格を有する。死への被投性は、死への被投存在(geworfenes Sein zum Tode)であり、死への存在の中へ投げ込まれてゐること(in das Sein zum Tode geworfen)である。死への存在へ投げ込まれてゐることに於て死への存在自身の被投性格が表明せられる。死への被投存在に於て死は存在に對して支配的であり、逆に存在は死に對して非支配的であり、無力である。死(非性)が存在を隅々迄支配してゐる。現存在は死へ投げ込まれてゐるが故に死を支配し超越することが出来ない。従つて死に對して無力である。現存在は死への存在の中に投げ込まれてゐるが故に死への存在を支配し、之を超越することは出来ない。死(非性)は現存在が死への存在へ投げ込まれてゐることの

非性の中で現存在の存在を隔々迄支配してゐる。

さて以前に決意性は本來的には先驅的決意性として規定せられた。この先驅的決意性に於て、現存在は、「その存在可能に就て了解する」のであるが、それは、「現存在が死の目前に進み出で、その結果現存在自らである存在者を全くその被投性に於て引受ける」と云ふ様式に於てである。そして「その固有な事實的な『現』を決意的に引受けることは同時に情況への決意を意味する」のである(382)。現存在は死の目前に自ら進み出る事によつて初めて被投性をば開示し、之を引受けることが出来る。「死への自由」(383)として自由に基く死への投企は、決して死の創造でも、死の超克でもない。現存在は死への被投性の背後に達することは出来ない。唯先驅的決意性に於て、死への被投性として現存在が常に既にある中へ投げ込まれてゐるその當の死へ自己を投企することにより、死をして支配的ならしめると同時に、この死が死への被投性の事實的「現」へ現存在を投げ返す、即ち現へ還歸することが出来るのみである。即ち死への自由と云ふ自由の優勢に於て、死をして支配的ならしめ、この死が支配的になることに於て現存在は被投性の無力を引受けるのである。「現存在が先驅的に死を自からに

於て支配的にならしめる時に、現存在は死に對して自由であり、自己の有限的自由と云ふ独自の優勢の中で、自己を了解し、その結果選擇が選ばれてしまつてゐる事の中にのみその都度存することの自由に於て、自己自身へ引渡されてゐることの無力を引受けるのである」(384)。この死への自由に於て開ける現存在の特殊の可能性たる死は直ちに先驅的實存を彼の事實的被投性の上へ投げ返す(386)。死への本來的存在たる先驅的決意性は死へ先驅しつゝ被投性へ現存在を歸來せしめる。かくて現存在は被投性として本來的に實存するやうになる。先驅的決意性は被投性への歸來を本質的に含んでゐる。良心の呼ぶことに於て呼ぶ者たる被投性に於ける現存在は、その先き呼びの呼び還しに於て、それ自身露けになり、開示される。即ち呼ぶ者が呼び返へされる。この先き呼びの呼び返しは、根源的には先驅的決意性として規定さるべきである。従つて呼ぶ者たる死への被投性に於ける現存在は、死への本來的投企を通じて自分自身を呼び出し、自分自身へ呼び還す。つまり死への被投性として規定された被投的根據は、死への投企を通じて根據自身を呼び出し、根據へ還るのである。然し根據はそれ自身被投的であり非的である。根據は非性によつて浸透せ

られてゐる。この非的な根據の非性が先驅的決意性としての根據付けによつて自ら開示される。然らば死への被投性としての被投的根據の先き呼びの呼び返し自己運動性は何によつて可能か。即ちそれが何によつて了解されるようになるか。それは時間性 (Zeitlichkeit) の時熟 (sich zeitigen) によつて可能であり、それから了解せられる。然らば時間性の時熟とは如何なる性格を有つのであるか。

今完全な構造内實を擧げず、形式的實存論的に解せられると先驅的決意性は、最も自己的な、特に勝れた存在可能への存在である。この様なものが可能であるのは、「現存在が一般に彼の最も自己的な可能性に於て自己へ到來する事 (auf sich zukommen) が出來、この自己へ到來させること (Sich-auf-sich-zukommenlassen) に於て可能性を可能性として維持してゐると云ふ様式、即ち實存すると云ふ様式に於てのみ可能である。この特に勝れた可能性を維持しつゝ、この可能性に於て自己へ到來させることが將來 (到來、Zukunft) と云ふ根源的現象である」。現存在の存在に本來的乃至非本來的な死への存在が屬してゐるなら、この死への存在は、今示され、更に進んで規定されねばならぬ意味で將來的なものとし

てのみ可能である (325)。即ち先驅的決意性を可能にするのは將來即ち自己へ到來することである。而も先驅的決意性に於て根據は自分自身に還歸し、根據として存在してゐる。「先驅的決意性は現存在をその本質的な負目存在に於て了解してゐる。この了解は實存的に負目存在を引受けて、非性の被投的根據として存在してゐることを意味する。被投性を引受けることは然し、現存在がその都度既にあつた儘の形で本來的にあることを意味する」(325)。根據が根據を引受けて根據として存在することは、既にあつた儘の形で本來的にあることであり、それを可能にするものは、既にあつたものへ還歸すると云ふ様式である。即ちこの還歸によつて始めて根據は自ら根據を引受けて根據として存在出来るのである。「被投性を引受けることの可能になるのは、將來的な現存在がその最も自己的な『その都度既にあつた様に』、即ち彼の既在 (Gewesen) でありうると云ふ様式に於てのみである。現存在が一般に、私があり來れるものとして現にある限りに於てのみ、現存在は還歸すると云ふ風に將來的に自己自身に到來しうる」(326)。最究極の、最も自己的な可能性としての死への先驅は同時に最も自己的な既在へ了解的に還歸することである。「現存在は將來

的である限りに於てのみ本來的に既在でありうる。既在性は或様式に於て將來から生起する」。即ち「現存在は本來的將來的に本來的既在である」(326)。それ故に根據が先驅的決意的に死へ先驅しつゝ、自分自身に還歸し被投の根據として存在すると云ふことの意味は「その都度既にあつた儘に本來的にある」こと、「私があり來れるものとして現にある」こと、「既在へ了解的に還歸する」こと、従つて將來的に還歸的であること、即ち將來的に既在的であることである。從て先驅的決意性を介して被投の根據が被投的根據として存在すること、即ち根據の非性の中に現存在が實存することが可能になるのは、死へ到來することが既在へ還歸することであると云ふ將來、既在の獨特な時間性によつてある。即ち將來は必然に既在的であり、既在は必然的に將來的である。更に又「投企は投げることに於て可能性を可能性として先んじて投げ、そしてそのものとして存在せしめる」(145)。死への投企としての先驅は自ら先んじてあると云ふ様式に於てある。『先に』や『先んじる』は、將來を示すものであり、將來として初めて一般に、現存在が、かれの存在可能がかれに問題となるといふやうに存在出来る事を可能にしてゐる。「この將來に基く『彼自身のために』

への自己投企が實存性の本質性格である。實存性の一次的な意味は將來である」(327)。換言すれば死への本來的存在としての先驅的決意性は、死としての自己へ到來すると云ふ將來に基いて可能である。これと同じく「既在」は、存在者が存在する限りその都度既に被投者である所の存在者の實存論的、時間的なる存在意味を意味する(328)。「現存在は常に被投的事實としてののみ『見出されてゐる』。この心情性(Befindlichkeit)に於て現存在は、猶ありつゝ、既にあつた、即ち既在的に於て現存在は、猶ありつゝ、既にあつた、即ち既在的に於て現存在として彼自身から襲はれる」(328)。心情性に於て心情的に見出されるものは、「現存在の現への被投性」、即ち「何處から何處へと云ふ點では彼はれてゐるが、彼自らに就てはしかく被はれずに開示されてゐる存在者の存在性格即ち現存在が存在すると云ふ事實」(35)である。この事實性は更に「既にある」と規定せられる。この「既にある」は「尙ありつゝ既にあつた」であり、この尙ありつゝ前から既にあつたは、とりもなおさず「既にあつてゐる」(gewesen ist)である。被投性には「既に」と云ふ時間要素が介入し、既にあつてあると云ふ既在(Gewesen)から了解せられる。被投性が既在性から了解せられることは、被投性の意味が既在

性であり、被投性が時間性より了解せられることを意味する。「事實性の第一次的實存論的意味は既在性にある」(328)。時間性としての既在性は過去性 (Vergangenheit) ではなく。現存在は事實的に實存してゐる間は決して過ぎ去つてしまつてゐない (nie vergangen ist)、けれども前から既にあつたし今も尙あると云ふ意味でいつも既在せるものである。而して現存在が存在する限りに於てのみ現存在は既在せるものでありうる。之に反して吾々は最早や眼の前になく存在者を、過ぎ去つたと呼んでゐる。それ故現存在は實存してゐる限り、「時間と共に」生成消滅し、部分的に既に過ぎ去つてしまつてゐる所の眼前の事象として確定せられ得ない。現存在はいつちも世界及び死へ既に投げられて在ると云ふ被投的事實としてのみ自己を見出してゐる (328)。先驅的決意性としての死への存在は、自ら先んじて死へあることであり、先んじると云ふ時間規定によつて共に規定せられてゐる。死へあるは死へ先んじてあることであり、死へ先んじてあることは即ち死としての自己へ自ら先んじて到來してゐること―將來―である。死への存在は時間性としての將來から了解せられる。同様に被投存在も又時間性としての既在性から了解せられる。一般に存在は時間性

から了解せられる。時間性は存在の意味である。「關心構造の形式化は、『先に』及び『既に』の表現で以て實存性と事實性の時間的意味を示してゐる」(328)。既在性、將來性より現在性 (Gegenwart) が結果する。「將來的に自己へ還歸しつゝ決意性は情況の中へ現前的に自己を移す。既在性は將來性から生起する、但しそれは既在的 (より適切には既在しつゝある) 將來が現在を起すと云ふ様式に於てである。この様に既在的『現前的將來性としての統一現象を吾々は時間性と名付ける』(326)。被投性、頽落性、實存性の連關が單なる斷片の接合ではなく統一現象であると同様に、既在性、將來性、現在性の連關も又統一現象である。被投的根據が頽落を越えつゝ先驅的にこの根據自身に還歸すると云ふ被投的根據の根據付けの意味をなすところの、即ちこの根據の運動性がそこから了解せられる所の時間性も又統一的な動性を有せねばならぬ。ところが上述のやうに既在性は或様式に於て將來から生起する。自己へ到來することは既にあつたまゝにあることである。即ち將來は既在への還歸を必然に、その内に含んでゐる。將來は還歸的である。將來は既在的である。而もこの既在的將來は必然に、現在あるものを現前せしめつゝ吾々に出會せる。既在的將來は

又現前的でもある。先驅的決意性に於てその意味をなすこの既在的現前的將來は又本來的時間性、根源的時間性とも名付けられる。

所でこの「將來、既在、現在は『の上へ到來する』『の上へ還歸する』『と出會はしめる』と云ふ現象的諸性格を示してゐる。この『く』(zu~)、『の上く』(auf~)、『のもとに』(bei~)等の諸現象は、時間性をエクスタクシオンそのもの (*Exotaxion schlechthin*) として顯はにする。即ち時間性は脱自そのもの („Ausser sich“ an und für sich) である。それ故吾々はこの様な特徴を持つた將來、既在、現在等の現象を時間性の諸々の脱自 (*Ekstase*) と呼ぶ (328-329)。時間性がこの「の上く」(*Aufzu*) と「く」の還歸 (*Zurückzu*) と「のもとに」(*Bei*) とによつて規定される限り時間性は所謂離脱 (*Entrückung*) である。時間は後から偶然に離脱的になるのでは決してなす。時間はそれ自身に於て「の上く」還歸することとして離脱的である、即ち脱自的である。時間性はかやうに脱自的性格を有する。そして脱自 (*Ekstase*) は自己を踏み出ること (*aus-sich-hinaustreten*)、離脱、脱自 (*ausser sich*) として規定せられる。そしてこの脱自離脱は方向を有し、方向の指し示す先きを同時

に開示してゐる。時間性がこの脱自的性格として特徴付けられる限り、脱自には離脱が存する。そしてあらゆる離脱と共に全く形式的な意味に於て何かへの離脱、何かの上への離脱 (*Entrückung nach, auf Etwas hin*) が與へられてゐる。脱自にはだから獨特な開示性が屬する。そしてこの開示性は脱自と共に與へられる (*Grundprobleme der Phänomenologie* 504)。「諸々の脱自は單純に『く』の離脱』ではなす。寧ろ諸々の脱自にはこの離脱の『何處かく』が屬してゐる。この脱自の『何處かく』を吾々は地平的圖式と呼ぶ (365)。つまり、「への離脱」としてあらゆる脱自は、それ自身に於て同時に且それに從屬的に離脱の「何處かく」の圖式を持つてゐる。そしてかゝる踏み出ることとしての脱自のこの「何處かく」は地平 (*Horizont*) と呼ばれる。より充分に言へば、脱自の地平的圖式と呼ばれる (*Grundprobleme der Phänomenologie* 574)。地平は無ではなす。それは開示された何かである。「への離脱」としてのこの脱自は單純に恰も無の中への離脱ではなく、「への離脱」として、脱自の根據に於て、離脱の様相から、従つて將來、既在及び現在の様相から夫々開示され、且つ脱自へそれ自身屬する地平を有する (*Grundprobleme der Phänomenologie*



574)。脱自は必然的に地平開示的である。脱自が顕現してゐる處では必ず地平が開示せられてゐる。脱自は常に地平的である。逆に地平は常に脱自の根據に於て可能である。地平は常に脱自に於て開け、脱自と共に存する。即ち地平は常に脱自的である。この「脱自的地平は三つの脱自の各々に於て異つてゐる。現存在が本來的にか、非本來的にか、將來的に自己に到來する圖式は『自己のために』である。又現存在が心情性に於て被投的なものとして彼自身に開示される圖式を吾々は被投性の『何處かに對する』乃至引渡されることの『何處かに』と解する。このものが既在性の地平的構造を示す。自己のために實存しつゝ被投的な自己自身へ引渡されてゐて同時に現存在は『何かのもとにある』として現前的である。現在の地平的圖式は『のために』(um zu)に依つて規定される」(368)。即ち時間性の脱自は將來に於ては自己の存在可能を、既在性に於ては被投性を、又現在に於ては事情を夫々地平として開示する。かくて本來的時間性たる既在的「現前的將來は既にあつたものとして現にありつゝ、手許にあるものと決意的に交渉することを可能にしてゐる。既にあつたものとして現にあるとは還歸的に現にあることを意味する。然しこの本來的時間性に於る

還歸は、未だ還歸してゐないこと即ち非本來性に於てあることを前提にする。即ち忘却(Vergessen)の非本來性を前提とする。配慮したのから創られた可能性への非本來的自己投企は、現存在がその最も自己的な被投性に於る本來的自己及び既在性をば忘却してゐることに依つてのみ可能である。忘却は決して記憶の無いことや排除してゐることを意味しない。忘却は一つの脱自性格を有する。忘却の脱自(離脱)は最も自己的な死への被投性乃至既在性から自己隱蔽的にヒトの中へ旋回的に逃避すると云ふ性格を持つ。そしてかゝる或物からヒトの中への逃避は逃避の何處かからを蔽つてゐて且それと共に逃避それ自身を蔽つてゐる。非本來的な既在性としての忘却は、それ故被投性に於る本來的自己をば忘れ果てる。即ち忘却とは私がそれに従つて先づ大抵あり來つた所のヒト自己なる非本來的な在り方の時間的意味である(339)。吾々はこのヒト自己の在り方の意味をなす非本來的な忘却を脱けて本來的に被投性を引受けつゝ被投性へ將來的に還歸するのである。即ち被投的な根據をば忘却の非本來性を超出しつゝ引受け之に還歸するのである。「先驅的決意性の本來的な、自己へ到來することは、同時にその單獨化の中へ投げ込まれた最も自己的な自己へ

還歸することである。この脱自は、現存在が決意して、既にある存在者を引受けることを可能ならしめる。先驅に於て現存在は、最も自己的な存在可能へ、先んじて自己を取り返す。本來的な既在を吾々は取り返す(Wiederholung)と呼ぶ(339)。先驅的決意性に於て本來的に被投的自己を取り返すことはこの被投性へ還歸することである。その還歸は被投性を忘れ、被投性から逃避してゐる忘却を突き破り超えることに於て生起する。然し忘却を超えつゝ被投的自己即ち被投性へ還歸するために、それは一つの媒介項を有する。即ちそれは不安である。不安は最も自己的な單獨化せる被投性と云ふ純粹な事實へ連れ戻す(zurückbringen)。然しこの連れ戻しは未だ被投性を引受けつゝ還歸する取返しではない。不安の中には決意に於て實存を取返しつゝ引受けることは存しなす。然し不安は可能的に取返し得るものとしての被投性へ連れ戻すのである。即ち不安に於て被投性は本來的存在可能として開示される。「この様にして不安は本來的な存在可能の可能性を共に開示し、そしてこの本來的存在可能は將來的なものとしての取返しに於て、被投的な『現』へ還歸せねばならない。取返し得ることの前へたらずることが、不安の心情性を構成する既在性の特別な脱

自的様相である」(343)。被投性を引受けて被投的根據として實存することは不安に於てそれが可能的な取返し得るものとして被投性を開示することを介して成就される。被投性を引受けて被投的自己を取返し被投的根據として實存することは既在的將來としての本來的時間性の時熟に基く。非本來的時間性としての忘却的現前的(非決意的現前的)豫期が之によつて超えられる。非本來性から本來性への超出は一つの否定を含む。然しこの否定は一つの時間性が全く時間性でないものになるのではない。一つの時間性の脱自が破られ没落して消え、他の時間性の脱自の様相が生起するのである。従つて之は變容と名付けられる。然し變容は非本來性を超出しつゝ生起する限り否定の契機を含まねばならぬ。「時間性は一般に何等存在者ではない。時間性は存在するのではなく時熟する」のである(338)。時間性は時熟すること(Zeitigung)である。それは存在者でも、存在でもなく、動的な生起の動性である。時間性は「の上へ」、「へ還歸する」、「のもとに」と云ふ地平開示的脱自の様相に於て顯現する。諸脱自の様相は時熟に於て成立する。「時間性の脱自の本質は諸脱自の統一に於る時熟である」(329)。然しこの時熟の動性は、先づ何かと自體的にあつてこの

何かと自己の外に踏み出て、かくて自己を自己の後ろにしてゐると云ふ風にして成立する脱自 (außer sich) ではなく。時間はその自身に於て脱自である―それが時間の時熟の本質である。そして時間は確かにこの脱自自體 (Außer sich selbst) である。即ち時間は、先づ物として眼前存在し、次いで自己の外に出て、その結果時間が自分をば自分の後に残してゐると云ふやうな何かではなくして、それ自身に於て時間は脱自自體 (Außer sich schlecht hin) 以外の他の何物でもなす (Grundprobleme der Phänomenologie 504)。「時間性は脱自そのもの自體 (Außer sich an und für sich selbst) である」(329)。時熟の本質は脱自であり、脱自の本質は時熟である。地平的脱自は顯現的であり、時熟は地平的脱自的である。時熟は地平的脱自の様相に於て顯現し、地平的脱自の様相は時熟の動性に於て地平的脱自の様相であり得る。否、地平的脱自の様相はそれ自身時熟の動性をその内に含み、動性そのものである。

時間性は存在者でないのみでなく存在でもない。却つて現存在の存在―關心―の意味である。關心は「(世界内部的に出逢はれる存在者)のもとにあることとして自ら先じて既にあること」である。「のもとにある」は

現在から、「自ら先じてある」は將來から、又「既にある」は既在性から夫々了解せられる。この夫々の「ある」が時間性から了解せられるのみならず、自ら先じてあるの中へは「先んじる」と云ふ時間規定が、既にあるの中へは「既に」と云ふ時間規定が介入してゐる。即ち存在の中へ時間が融入してゐる―それは恰も存在者 (Seiendes) の中へ存在が融入してゐるやうに。かやうに存在は時間性から了解せられ、存在は時間の上へ投企されてゐる。従つて存在は時間を指示し、時間から了解せられる。即ち時間性は存在の意味である。

吾々は先驅的決意性を現存在の絶對的不可能性の可能性への本來的存在だと規定した。かゝる終りへの存在に於て現存在は本來的還歸的に死への被投性として實存してゐる。「現存在はそこで現存在が盡きてしまふ様な終りを持つてゐるのではなくて、有限的に實存してゐる。先驅的決意性の意味を成す時間性を一次的に顯現する本來的將來は、之によつて有限的なものとして自から露はにする」(329)。凡そ現存在は本質的根源的に終りへの存在 (Sein zum Ende) である。終り (Ende) は「そこに於て現存在が完成される完成 (Vollendung) ではなく。終りは又止むこと (Aufhören) とも、仕止ること (Ferti-

gkeit) ども、消え失せること (Verschwinden) どもなく。此等の終ること (Enden) の諸様相のどれに依つても現存在の終りとしての死は適切に特徴付けられない。死に於て現存在は完成もしないし、單純に消え失せもしない。寧ろ現存在はそれが存在する限りいつも既にその終りである。「死によつて考へられた終ること (Enden) は現存在の終ること (Zu-Ende-sein) を意味せずしてこの存在者の終りへの存在 (Sein zum Ende) を意味する」(245)。現存在はそれが存在するやうになるや否や、常に彼の終りである。現存在が常に既に彼の終りであるとは、終りが時あつて現存在につけ加はることではなく、現存在が終りへの存在によつて規定されることを意味する。現存在は終りへの存在として常に既に彼の終りである。即ち現存在は常に既に終りである。換言すれば現存在は常に既に有限的 (endlich) である。この現存在の終りへの存在即ち有限性は、將來に基く先驅的決意性によつて本來的になる。根源的本來的將來は「自己へ到來すること」であり、「非性の乗超え得ざる可能性としての自己へ實存的に到來すること」である。「根源的本來的に自己へ到來することは、最も自己的な非性の中で實存することの意味である」(330)。死 (非性) の

中に實存すること、従つて死 (終り) への存在が有限的であることから、その意味をなす將來も又有限的であると規定せられる。將來は必然的に又還歸的即ち既在的である。既在性は、死への被投性、被投的根據を引受けて被投的根據として實存し、死の非性のみならず被投的根據の非性の中に實存することの意味である。それ故既在性も又有限的である。現在は有限的な既在的將來より生起するが故に又有限的である。時間性は根源的に有限的である。即ち時間性は有限性である。

所での終りへの存在は「現存在の不可能性の可能性」への存在であり、「現存在の端的な非性」への存在である。かゝる存在は又被投存在である。死への被投性はそれ自身非性の性格を有する。かゝる死の非性、被投性の非性は、實存的非性であつて決して論理的非性ではない。然し一般に論理的非性のみでなく實存的非性—非性一般を可能にするものは何であらうか。非 (nicht, un) は存在者 (Seiendes) や存在 (Sein) からは來なく。Nicht は Nichts (無) から來なければならぬ。「非は無の無なること (Nichts nichtet) から生ずる」(Was ist Metaph. 22)。論理的非のみでなく、實存的非も又この無の無することから生ぜねばならない。無は存在者

でないばかりでなく存在でもない。無は何處にもない。無は此處 (Hier) とか其處 (Dort) とか現 (Da) 等と云ふやうな一切の場所的規定を持たない。無は無場所的である。無はそれが無規定直接なるが故に純有と同じものであると云ふが如きものではない。「無の無することは存在者の存在の中で生起する」(Wasist Metaph. 20) と云ふが如きものでもない。無は存在の内部に位置付けられない。無と存在との間には同列的な如何なる相屬的關係 (zusammengehören) もない。有限的として規定せられた死への存在に於ける死は、現存在がそこでは端的にないこと、即ち現存在の非性である。死は無と云はんよりは非である。それは實存的な限界概念である。この非は寧ろ無に基かねばならぬ。存在者をして存在者たらしめる存在者の根據は存在であると同じく、存在をして存在たらしめる存在の根據は無でなければならぬ。存在が存在者と同列的關係に立たぬと同様、無は存在と同列的關係に立たない。存在者、存在の究極の根據はかゝる無に求められねばならない。存在は、それが存在であつて無では無いことによつて存在であることを確實にし、存在者は又それが存在者であつて無ではないことによつて存在するものであることを確立する。存在はそれが無

で無きことによつて存在としての存在であり、存在者はそれが無で無きことによつて始めて存在するものであり得る。「不安の無の明るき夜に於て初めてかゝる存在者としての存在者 (存在者自體) の根源的開示性、即ちそれは存在するものであつて無では無い (nicht Nichts) と云ふ開示性が成立する。この講義に於て吾々によつて附け加へられた『そして無では無い』と云ふことは然し決して後から附け加へられた説明ではなくして存在者一般の開示を先行的に可能にするものである」(Was ist Metaph. 19)。この無で無きことによつて存在者は存在者としての存在者 (Seiendes als solches) であり、存在は存在としての存在であり得る。存在者が存在者としての存在者として確立される爲には「それが無で無い」こと、即ち nicht Nichts に基かねばならない。存在者としての存在者は nicht Nichts に基いて開示される。同様に又、先驅的決意性に於て現存在が「現存在の端的な非性」たる死へ先驅すると云ふ正にこのことによつて、自己が無で無くして存在であることが非隱蔽的に開示される。存在は無で無き存在として確立される。この存在者をば存在者としての存在者として、存在をば存在としての存在として確實に開示する非無 (nicht Nichts)

は然し非と云ふ實存的否定を表明する。無で無き、無の他者として存在及び存在者が自體的に自覺されることはこの否定に基いてのみ可能である。即ち、存在、存在者の確立は、無に對する他者性に基き、この無に對する他者性は然し否定、非に基く。然し一切の否定、非は無の無することに基く。それ故無の無することに基いて nicht Nichts は可能であり、この否定に基いて他者性は可能であり、存在、存在者が自體的に開示される。即ちそれは無の無することが存在者、存在の絶對的根據であることを意味する。ところで死が非性であるのみでなく死への被投性自身が非性である。即ち非性の被投的(非的)根據自身が非性である。死の非が無に基いて開示されるのみでなく、死への被投性、即ち被投的根據自身の非性も又無に基いて、且、無から開示されねばならない。先驅的決意性は無の無することに基いて始めて非性たる死を開示し、死への存在、乃至死への被投、存在を開示しうるのでなければならぬ。無は死への存在、又は死への被投性、被投的根據が本來的にかゝるものとして存在するための根據でなければならぬ。即ち無は被投的根據の根據でなければならぬ。死(非)が現存在の中で開示されると云ふことは、この非が現存在の中へ還

元解消せしめられると云ふことであつてはならない。一切の非は無に基く。それ故死が現存在の中で開示されると云ふことは、現存在自身が無に基いてゐることの證左でなければならぬ。現存在自身が無に基いてゐるが故に、死(非)が現存在に於て開示されるのでなければならぬ。然し乍ら根據としての無は根據として存在するのではない。即ち根據は無い。根據としての無はそれ故無根據である。何等根據なきことが無としての根據の特徴である。無が根據として規定されれば無することは又根據付けでなければならぬ。然しこの根據付けは無根據の根據付けである。それは存在する根據の根據付けではない。この無の無することたる無根據の根據付けはあらゆる意味に於て對立性を離れてゐる。それは存在者、存在を自分に對立せしめ得ない。何故なら無は何物も無きことであり、且對して立つ何物も無きことである。存在者、存在に對して立つやうな無は無でなくして寧ろ有である。それ故無の無することは非對立化的に存在、存在者を根據付けねばならぬのである。若し無の無することが有的な對立化の働きの (gegenstehenlassen) であるならば、この働きの自ら對象に成り、この對象は同時に働き自身に對立し、茲に對象の開示は同時に働きの開示

を結果する。之はやがて働き自身が主體として對象に對立することになる。かくて對象の根據は働きに、更に主體に求められ、而もこの根據は對象に對して對立的相對的に現成してゐる。この根據の現成は根據が在ることであり、對象の存在は同時に、この對象に對して對立的な根據の存在することを意味する。従つてそれは根據無き無根據に矛盾することになる。それ故無根據の根據付けは非對立的でなければならぬ。有的な對立化の働きには制限がある。無根據の根據付けにして始めて能く一切を場所付け根據付けることが出来るのである。

死への存在、従つて死への被投存在は有限的である。そこから時間性の有限性が導出せられた。「根源的本來的將來は『自己へ到來すること』、即ち實存しつつ非性の乗超え得ざる可能性としての自己へ到來することである。根源的將來の脱自的性格は、正にこの將來が存在可能を開示してゐること、即ち自ら開示されてゐること、従つてかゝるものとして非性の決意的實存的了解を可能にしてゐることに存する」(330)。本來的將來の脱自は死をば開示し之と共に脱自そのものが同時に開かれ、かくて先驅的決意性を可能にしてゐる。本來的將來は死としての自己へ到來することであり、常に死へ到來してゐる。

る。本來的將來の脱自は常に死を開示してゐる。自己への到來は常に死への到來であり、終りへの到來である。本來的將來の脱自は常に既に終りを開示し、終りへ到つてゐる。それは終りを開示することによつて始めて脱自たりうる。本來的將來の脱自は常に既に終りのものである。本來的將來は常に既に有限的である。時間性のこの有限性に基いて始めて死への被投存在の有限性が可能になり、死への存在の有限性は、時間性の有限性から了解せられる。この時間性の有限性は時熟に於て顯現する。然し本來的時間性の時熟は非本來的時間性を超出しつつ、顯現する。この非本來的時間性を超出することは、この非本來的なものが突き破られ沈んでしまふことであり、それは一つの實存的否定である。この非本來性の實存的否定に基き、且それと一つになつて本來的有限的時間性が時熟する。有限性の開示は有限的なものゝ力のみによつては不可能であらう。將來の脱自 (Auser sich) は死を開示する。然しこの脱自の死の開示は、先づ自己を踏み出て (auser sich) 次いで自己へ到來する (auf sich zu) のではない。この自己 (sich) の開示が同時に「へ到來すること」(auf zu) たる脱自 (auser sich) の開示せられることであり、その間に如何なる間隙も許されない。死

の開示なくして脱自たり得ず、脱自なくして死の開示はあり得ない。死が開かれることは同時に「へ到来すること」の脱自が共に開かれることである。死は非であり、非は無に基く。且、有限的時間性の時熟は實存的否定契機を含む。否定契機は無に基く。時熟はそれ故無に基く。かくて時間性の時熟が無に基くが故に死の非が脱自の内部に於て顯現し、同時に脱自自體が顯現し得るのでなければならぬだらう。凡そ非本來より本來への變容は否定的契機を含まねばならない。本來的時間性の顯現は非本來的時間性を超出しつゝ、自分自身に還歸すると云ふ超出的自己還歸の様に於て行ぜられる。この超出的自己還歸は否定の契機を含まねばならない。一切の非、一切の否定は無から來り、無に基かねばならない。本來的有限的地平的脱自の顯現はかくて無に基いてのみ可能であらう。かくて本來的有限的地平的脱自の顯現は無の無することに基いて、即ち無根據の根據付けに根據付けられてのみ可能であらう。

脱自はかやうに常に既に地平開示的である。脱自(Außer sich)は又「脱中心的」(exzentrisch)である。然しこの脱中心は先づ中心としての自己があつてこの中心を踏みでて中心を後ろに残すと云ふ意味に於て脱中心な

のではない。脱中心的とは中心が何處にもないことを意味せねばならぬ。Außer sichの sichにも又 auf sichの地平としての sichにも中心がないことでなければならぬ。脱中心的脱自とは寧ろこの「からへ」(aus-auf)として純粹な方向自體である。それ故脱自それ自體(Außer-sich selbst, Außer sich schlechthin, Außer sich an und für sich selbst)として表現される。然しこの純粹方向は方向の指す地平なくしては方向たり得ない。方向と地平とは相互に依存的である。即ち地平の開示なければ脱自なく、脱自なければ地平もない。地平と脱自との相互依存の相對性はそれ故有的である。本來的將來の脱自に於てそれは死(非)を開示するが、それは「即ち將來自身開示される」ことである。地平が開示されることは脱自自身が開示されることである。地平が開示されることは同時に純粹な動的方向自身が開示されることである。純粹な方向の動性が地平として自己を開示しそれと同時に自己自身方向として開示し、之によつて地平と方向の相對性を現成すると云ふ脱自の動性(時熟)は有的な對立化の働きである。然し將來の脱自に於て開示せられた死は「現存在不可能性の可能性」であり「現存在の非性」である。「現存在の非性」とは現存在が全



體的根源的でないことであり、死に於ては現存在の脱自的時間性もないことではなければならない。かゝる非としての死が有限的對立化的有的な働きから開示せられるとは考へられない。非 (nicht) は如何なる意味に於ても無し (Nichts) から開示されねばならない。地平的脱自の動性 (時熟の動性) が無に基くが故に死なる非が時熟の動性に於て開示されるのでなければならぬ。無に基く非の開示によつて同時に方向自身が開示されるやうになるのではなくてはならない。かくて地平的脱自の時間性自身が無に根據付けられてゐねばならない。

時間性に基く死への被投性の開示的現成は、現存在が自己の無力性に絶望することである。現存在自身によつては絶對に打ち越え得ぬ死への被投性に泣き絶望して、而も之を突破せんと希求することは吾々の宗教的な願ひである。然しこの死への被投性を超越することは被投的非的根據の根據付けだけによつては絶對に不可能である。この被投的非的根據の根據付けは、死を超越し、死への被投性をば超越することが出来る根據付けではなく、唯死への被投性を單に肯定的に引受け、取返して、死への被投性の無力性、非力性の中に止まり且この中に安住するに過ぎないのである。それは更に進んでこの死

への被投性に於る無力性に泣き絶望しつゝこの死への被投性を超越せんとする宗教的希求の願ひを有せぬものである。被投的根據の根據付けは、この無力性の中に寧ろ喜びを見出すのである。それは不安の中に喜びを見出し、無力性に絶望すること自體の中に喜びを見出し、決して無力性に泣くことはないのである。「先驅的決意性は死を超越する爲に作り上げられた迂路では決してない、寧ろ良心の呼び聲に隨ふ了解であつて、死に對して、現存在の實存を支配し、すべての逃避的な自己隠蔽を根底から追ひ散らす可能性を許してやつてゐるものである」。「先驅的決意性は決して實存とその可能性を超えて飛躍する『觀念主義的』な要求からも生ずるのではない」。「單獨化された存在可能の前に齎す冷靜な不安と、この可能性についての用意された喜びとが一つになる」(310)。被投的根據の根據付けに於ては、死への被投性をばその自己隠蔽から開示し、この被投性の無力性をば引受け取返して、無力性の中に安住し、そこに寧ろ冷靜な喜びをば見出すに止つてゐる。然し無力性を引受けて無力性の中に在ることは、その本來の意味から云へば喜びを見出すことではなく、寧ろ無力性に泣くことではなければならない。現存在が無力性、非性に泣き、而も單に

餘猶を以て泣くのではなく、全體的根源的に泣き盡し、この無力性、非性を超越出來ざる所に超越せんと希求する願ひは、單なる觀念主義的な願ひではなく宗教的な希求である。この希求を充たすものは被投的根據の根據付け、更には有形的な時間性ではない。絶望即超越、無力性に泣くこと即突破として、死への被投性をば突破超越することを可能にするものは、被投的根據、及びその意味をなす時間性が常にそれに根據付けられてゐる所のかの究極の根據たる無の無すること、無根據の根據付けによつて始めて可能であらう。無に根據付けられた時間性が死を開示し、この地平的脱自が開示せられることに基いて、死への被投性としての被投的非的根據が還歸

的に現成し、この有限な有形的な自己の非性に絶望して泣き盡すことによつて同時にこの有限な有形的自己が全的に根源的に超えられる。これは同時的に完遂される。有形的自己の有限性に絶望的に泣き盡すことがなければ有限性の超越はあり得ない。有限性の超越は無に根據付けられこのみ可能であらう。逆に無の根據付けが純粹に働く時、絶望即超越が現せられるのであらう。死の開示は絶望即超越への契機として無の無することの恩恵でなくてはならないであらう。ハイデッガーの實存は宗教的實存に觸れ、且つ宗教的實存に迄徹底せられねばならぬであらう。

(註) 書名なき頁數は「存在と時間」の頁數を示す。